

感動に言葉はいらない

津川拓也さん（リオデジャネイロパラリンピック銅メダリスト）



Profile 津川拓也（競泳選手）

1992年大阪府生まれ。3歳から水泳を始め15歳で初の日本代表入り。2012年ロンドンパラリンピック100m背泳ぎ6位入賞。2016年リオデジャネイロパラリンピック100m背泳ぎ銅メダル。豊中かがやき大賞、大阪スポーツ大賞受賞。ANAウィングフェローズ・ヴィ王子株式会社（賃輸）勤務。

平成28年（2016年）リオデジャネイ

ロパラリンピック競泳100m背泳ぎ（知的障がい）の活躍が記憶に新しい津川拓也さんは、豊中市内の会社に勤務しながら競技生活を続けています。

職場の上司である光定亨さんは、「人の動きを正確に記憶することが得意な津川さんは、複雑な作業もミスが少なく高い作業品質を維持しています」とその仕事ぶりを話します。「彼は、優しい笑顔で、場の雰囲気を和ませてくれる職場の人気者です。みんなの応援に応えたいという気持ちで、パラリンピックではメダルを取ると、繰り返し言っていました。目標に向かってひたむきに努力し、大舞台で快挙を達成した彼の姿に、職場の仲間たちは言葉にできない感動と大きな希望をもらいました」。そのときの仲間たちの目の輝きが忘れられない、とも。

長年指導しているコーチの福留悠介さんは、「彼は泳ぎながら笑っているときがあるくらい、泳ぐこと自体を楽しんでいるようです。社会人として仕事をすすめるようになってからは、こころ一番で力を出せるアスリートらしさも身につけてきました。会社に所属して競技していることを理解し、結果を出す責任感が生

まれていると思います」。

母親の津川智江さんは、津川さんが1歳のとき、表情がまったく変わらないと気づきました。唯一、お風呂では笑顔になるのが水泳を始めたきっかけと話します。トップ選手の水中映像を繰り返し見せたり、津川さんがつける毎日の練習日記の手助けなどで競技生活を支えます。「どうすればできるようになるのかと考え、作戦を立てるのを楽しんでいます。小学生のときに、意味は分からなくても文字を書き写す練習を続けたからこそ、自分で練習日記を書けるようになりました。いつか自分で予定を書けるようになるかもしれないと希望を持ち続けます。障害を持って生まれただけで健常者よりストレスは大きいはず。それでも苦しいことを乗り越えたからこそその喜びも感じてほしいと思います」。

「世界に行くのは楽しいです。たくさんのお国へ行ったんです。どこに行っても困ったことはなかったです」と明るく話す津川さん。今の目標は自己ベストの更新。そして、東京2020パラリンピックに焦点を当て、日々練習に励んでいます。



目次 特集 みんなでスポーツ

1 感動に言葉はいらない
とよなか魅力インタビュー

3 みんなで楽しむ
みんなのラジオ体操
仲間とサイクリング

9 みんなで応援
輝く高校生スポーツ
輝くシニアスポーツ

15 とよなかグラフィティ
「チアを愛する気持ちは誰にも負けない」



表紙の写真は、5月14日に桜井谷小学校で行われた、平成29年度特別巡回「ラジオ体操・みんなの体操会」